

(10:00開始)

○阿部部会長 皆様おはようございます。

これから約8回、皆様と議論をさせていただく機会を持つことになると思います。正直なところ、余りこういう司会という役割をやったことがありませんので、お見苦しい点もお見せすることになるかもしれませんが、なにとぞ御了承いただければと思います。よろしく願いいたします。

まず、今日は御欠席の委員が2名いらっしゃいます。上村委員と石戸委員はご所用のためご欠席となっております。そのほかの委員の方々は皆さんそろっていらっしゃいます。

なお、2月1日に開催されましたフロンティア分科会によって上村委員が部会長代理として指名されておりますことお伝えいたします。

それでは、本日の議事について御説明いたします。今日は第1回目の部会となりますので、まず私たちがどういうタスクを与えられているかという点を御説明させていただき、それから、これからの議論の進め方を御説明させていただきたいと思います。

資料3と資料4がお手元に配付されていると思いますので、ごらんいただければと思います。

その前に、運営要領として2点、御了承いただければと思います。

1つ、部会の配付資料及び議事要旨については、部会終了後、原則として公表いたします。ただし、部会長が必要と認める場合には、その一部または全部を非公開とすることができます。私のスタンスとしては、基本的にすべてを公開してやっていきたいと思っておりますので、もし非公表にしたいという資料等ございましたら個別に御相談いただければと思います。

また、部会の議事内容の公開については、議事要旨の公表をもって差し替えます。したがって、終了後に記者会見等をする予定はございません。委員の皆様におかれましては個別に記者等から取材がある場合もあるかと思いますが、そのときは御自分の発言の範囲で御対応をお願いいたします。

なお、要領には明確には書いてありませんが、議事要旨の公表に際しては、当面は委員名は匿名といたします。分科会、部会の活動すべてが終了したときに、発言者の名前を記した形で公表することになっております。

それでは、議事の進め方について次に入りたいと思います。資料3と資料4になりますけれども、まず資料3「フロンティア分科会及び部会における議論の進め方」をごらんください。分科会の使命としてここに書いてありますが、2月1日にフロンティア分科会というこの部会の1つ上の分科会が開催されました。そのときには野田総理自ら御出席なさって、この分科会に対する御要望を発言されました。その中で私が理解したことを皆様と共有させていただきたいと思います。

まず、分科会の使命としては、日本人が「希望と誇りある日本」を取り戻す中で、中長期的に目指す姿を具体的に示すこと。それが私たちの使命として与えられております。

具体的というのは抽象的な議論だけではなくて、実際にどのような生活、どのような日本があるかということ、2050年を1つの目標として、そのときに日本がどうあるべきかということを考えていくというのが、この分科会に課せられた仕事でございます。

その中間地点として、2025年に向けての方向性を検討し、中長期のビジョンとしてとりまとめることにいたします。この成果は国家戦略会議、それがこのフロンティア部会のもう一つ上の会議となりますが、本年半ばごろに策定する日本再生戦略の中に反映されることになっております。

フロンティア分科会というのは4つの部会からなっております。4つの部会というのは繁栄のフロンティア部会、幸福のフロンティア部会、叡智のフロンティア部会、平和のフロンティア部会で、それぞれのタスクというものが課せられております。私たちの幸福のフロンティア部会というのはここにありますが、経済的基盤、これは恐らく繁栄の方で議論されるかと思えますけれども、経済的基盤だけでは人々の幸福といえますか、幸福はhappinessともいいますしwell-beingという形で理解されることもあります。不可欠な条件であるけれども、それだけで幸福になるというものではない。では、人々が実際に幸福な、well-beingが高い状態になるには何が必要であるのか。そのためには何をやっていくことが必要であるのかということを考えていくというのが、幸福のフロンティア部会の役割でございます。

そこでは勿論、今、議論されております税と社会保障の一体改革の議論ですとか、これからの社会保障をどうしていくか、これからの教育制度をどうしていくか、そのほかにもさまざまなことが入ってくるかと思えますけれども、それを根本的なところとして人々の幸福感を高めるための条件、何の条件をつくっていかなければいけないのかということを考えていく部会でございます。

そして、この問題は私自身、貧困問題をやっておりますので、よく感じるのですが、今ある状況、制約からそれを達成するためにはどうしていくかと考えますと、非常に絶望的になってしまうところがあるわけです。というのは財政状況も厳しいですし、あらゆる経済指標も悪い方に向かってばかりいるということですので、これではどうにも達成できないのではないかというマインドに追い込まれてしまうわけですが、それを逆に2050年にはどうあるべきかということ考えた上で、ではそこに到達するにはどうやっていくかということ、バックキャストで考えていくというのが、このフロンティア分科会のアプローチでございます。

それについては図式化されたものがありますので、資料4、バックキャストによるアプローチというものがございます。

まず①として現状認識があります。

②として将来像というものがあるんですけども、ここで2050年のあるべき姿を思い浮かべます。この中には勿論2050年に至るまでにさまざまな経済状況が変化しますので、そのところを考慮していかなければいけないわけです。

2050年の姿から2025年、そこに到達する中間地点として2025年にはどういう姿になっているべきかということを考え、最後に現状から2025年のあるべき姿になるまでにはどういうものが必要であるかということを考えていくというのが、今回のアプローチです。

ですので、皆様にまず求められているというのは、2050年、2025年の日本のあるべき姿というものを、それほど今のいろいろな制約に影響されずに自由に発想していただき、それで総理が使われた言葉で、やんちゃな議論、斬新的な議論をとおっしゃってありました。つまり、今ある状況からどこかに行こうとすると、いろんな制約があって余り斬新的なこともできないし、これもだめだ、あれも無理だとなってしまうんですけども、そうではなくて、「こうあるべきだ」、それを聞いて今の若い世代がわくわくするような、こんな日本だったら私たちは頑張れると思えるようなものをまず描いてほしい。

では、そこに到達するには何が必要か。それに到達するために全速力で向かっていくというアプローチをとるということですので、本当にこの場では自由に発言していただきたいと思います。

形式的には後ろにもたくさんの方々がいらっしゃいますし、かたくなってしまうところがあるかと思いますが、皆様年齢的にも非常にお若い方が多いです。飲み会にも行っているような気分で、いろんな形でアイデアを出していただいて、その中から有効的なものは何かということをつくっていかうと考えておりますので、約8回になりますけれども、自由に発言していただければと思っております。

時代の変化ということについて5つ簡単に申し上げますと、まず第一として人口の変化というものがございます。実のところ、2050年というのは恐らく日本の高齢化のピークのちょっと手前ぐらいの時代。この後にピークを迎えるんですが、ほとんどそれに到達しているような時点でございます。ここに書かれておりますように、その時点では老年人口に対する生産年齢人口、老年従属人口指数とも言われますけれども、76.4%になります。ということは、ほぼ1人の勤労世代の人に対して1人の高齢者がいるという状況です。ですので、非常に高齢化率が高まっている時期でございます。

ちなみに、今この率は36%です。ですので1人の高齢者を約3名の勤労世代で支えている状況なんですけど、これがほとんど2対1を超えて1対1に高いような状況になっているのが2050年です。

また、逆都市化で都市でも人口減が始まっています。日本全体の総人口も2050年には9,515万人になると予測されております。今より3,500万人減っています。ですので人口的にもかなり、既に減少は始まっていますが、大きく減少する時期であることを念頭に置いておかなければいけないと思います。

次に、世界の情勢に目を向けますと、アジア化というのが非常に顕著にあらわれてくる時期かと思えます。2050年のアジアの人口は52.2億人と推測されておまして、全人口の58.6%になります。ですので欧米中心の時代からアジアの時代にということで、人口ですとか経済ですとか金融ですとか、あらゆる意味でアジア中心に変わってきている時期か

と思われます。

3つ目が低炭素化の変化ということで、これも低炭素化が必要だと言われ始めて大分ありますけれども、各地で温室効果ガスの排出量割当などが決められ、2050年には80%削減されていることが求められている時期でございます。

4つ目にガバナンスの変化。トップダウンの中央政府が中心となって日本全体を引っ張っていくという形のガバナンスから、地方自治体の比重が増加し、より国民の参加が求められるような参加型合意形成の仕組みが発達しているだろうと思われます。また、国際的にもアジア・太平洋などの多国間での重層的な合意形成がつけられているところかと思われます。

最後に、災害・エネルギー分野ということですが、これは東日本大震災からも非常に顕著にわかってきていることかと思われますけれども、自然災害との共存を考えていかなければいけない。2050年までの間には必ずまた災害にも襲われるでありましようし、それに対してどのような国づくりをしていくべきかということを考えていかなければいけませんし、また、原子力エネルギーという、これは先ほどの低炭素化とも関わってくるかと思われますけれども、どのような方向性が必要かというのがかなり、これは50年先ではなくて喫緊の課題としてありますけれども、そのころには大分違うエネルギーの組成になっているのではないかと考えていただきと思われます。

最後に、このような時代の変化を踏まえて、バックキャストिंगによって将来のあるべき姿を設定する。その中で私たちが与えられたところは幸福の分野ということでございませう。ここで挙げられているのは社会的公平、復元力、社会的紐帯と言われているんですけれども、私としてはこの中では少なくとも3つの重点分野が、幸福の部会としては特に見る必要があるのではないかと考えております。

1つが生活の部分です。人々の生活という意味での life と言っているかもしませう。これは繁栄や叡智や平和にそれほど直接的に出ないかと思われますので、この幸福の部会でやっつけなければいけないところかと思われます。

それから、幸福のタイトルそのものにありますように happiness、well-being の問題。どうしたら人々、個人が happiness を達成できるのかという問題。

3つ目ですけれども、これは私が特にお願いしたいと思われますのが、子どもの分野に注目する必要があるのではないかとございませう。2025年、2050年というのは先ほどのフロンティア分科会のと看でもたびたび出てきたことなんですけれども、私たちの子どもの世代が今の私たちの年齢ぐらいに達している時代のことを考えなければいけないことなんですので、やはり子どもに対する政策をどうしていくかということが非常に重要になってくるのではないかとございませうので、その点、私の独断的なところもございませうが、皆様にも考えていただければなと思われます。

以上でございませうけれども、これまでのところで御質問等ありますでしょうか。

○新田委員 最後の子どもを考えてというのは、将来の世代のことを考えてという意味で

すね。そういうことでまとめなさいと。

○阿部部会長　そうです。

よろしいですか。それでは、これから皆様から御意見を頂戴してまいりたいと思います。ただ、いきなり議論をしろと言われても難しいでしょうから、まず口火を切る形で私の方から 10～15 分程度、私の専門分野から見る将来の幸福の姿のお話をさせていただきたいと思います。

皆様の方に色付きのパワーポイントのペーパーがあると思います。それをお手元にごらんいただければと思います。

皆様のところにも行っているかと思いますが、コメントの提出が求められております。これはあくまでも最初の議論の口火を切るために皆様のお考えをお聞きしたいという趣旨でございますので、これから後ほど 2 回、3 回にわたって皆様の方にも報告といたしますか、御発表をいただく機会を設けさせていただきたいと思っております。その最初として今回は私と玄田委員からお話させていただきたいと思っております。

まず一番最初の質問ですが、現在の延長線上にある 2050 年の日本の幸福の姿というのはどういうものかということをお聞かしております。

私の自己紹介を兼ねて申しますと、私は貧困と社会的排除を研究している者です。専門分野としては公的扶助です。いわゆる生活保護制度ですとか、そのほかのいろいろな低所得者対策を専門としている者なんですけれども、その観点から考えますと、現在の延長線上というのは、おそらく幸福の姿というのではないと思われま。

まず 1 つとして、貧困と格差の増大が社会問題として非常に顕著になるのではないかと思います。資料の方にもございますが、こちらは御承知にない方もいらっしゃるかと思いますので簡単に説明させていただきますと、相対的貧困率というもので、昨年 7 月に厚労省が発表したものです。現在日本全体の貧困率というのが 16%で、子どもの貧困率でも 15.7%ございます。というのは、国民の 6, 7 人に 1 人が貧困状態にあるということです。

例えば 1 人親世帯など世代タイプを区切ってみますと、非常に高い率となりまして、1 人親世帯ですと 50.8%が貧困という状況にあります。

資料の中に貧困について幾つか資料を配らせていただきましたので、これは皆様のお時間のあるときに見ていただければと思います。私としては幾つか貧困に対して特徴的なところを皆様に御紹介しつつ、私の幸福の姿というものを御説明させていただきたいと思っております。

スライドのページ番号として 11 番をめくっていただきたいのですが、これは子どもの貧困の影響というところですが、例えば子どもの学力、進学率、健康、不登校、非行、児童虐待など、いろいろな well being のとり方があるかと思うんですけれども、あらゆる指標で見ても子どもの置かれた経済階層というものと非常に密接な関係があることがわかっています。ここでお見せしているのは学力のケースですが、非常にきれいな相関があるというのが一目でおわかりになるかと思います。

スライド 10 は例えば子ども期に貧困であった場合、大人になったときにどのぐらいほかの人と比べていろいろなリスクが増えるかということですが、例えば必要な食料が買えないというリスクに関しては、普通に比べて 3 倍のリスクになりますし、生活保護の受給を考えても 3.5 倍以上リスクが高くなります。ですので、もう既に現在「貧困の連鎖」ですとか「社会階層の固定化」というのは、かなりの程度で進んでしまっていることが考えられます。

このような格差社会になってきたというときに、どのような影響があるかというのはスライド 30 から見ていただければと思います。ここで幾つかお見せしているのは近年イギリスで大変評判になってベストセラーとなった、リチャード・ウィルキンソンという方の本があるんですけども、そこの中から取ってきたものですが、格差の大きい社会というのは、いろいろな意味で社会全体のコミュニケーションですとか、人間と人間との関係の質を低下させるということを言っています。

例えばここにありますグラフを見ますと、人々の信頼感、例えば道で会った人をどのぐらい信頼するかということですが、普通の一般の人をどれぐらい信頼するかという信頼度の指標が、その国の格差の大きさに相関があることがわかっています。つまり、格差が大きい社会では人々の信頼感が低下します。

同じようなことで、例えばコミュニティとの関わり。ボランティア活動の活動率ですとか、社会資本と言われていたような地域の活動への参加ですとか、地域新聞を読むですとか、地方選挙に投票に行くというような地域との関わりというものにも、格差と非常に密接な相関があることがわかってきています。

格差が大きい社会というものは、人々が攻撃的になるということもデータでわかってきています。殺人も増えますし、そのほか心理学的に人々の攻撃性というものが測れるんですけども、それで見ても格差が高い地域ほど攻撃性が高くなると言われています。

また、それは人々の健康に影響してきます。格差が大きい地域ほど人々の健康度が悪くなることもわかってきています。それはただ単に格差の下の方の人、貧困の人の健康が悪くなる、または健康の人の数が増えるので全体的に悪くなるということではなくて、所得の高い層でも格差の低い地域に住んでいる人と高い地域に住んでいる人を比べると、高い地域に住んでいる人の方が健康度が悪いということなんです。

ですので、そういうことがこのまま進展いたしますと、今、例えば東日本大震災のときに海外メディアが絶賛したような、安全で秩序が保たれた日本というものがあるわけですが、そのようなものがどんどん失われていくかと思われまます。ソーシャルキャピタルも低下しますし、犯罪も増加しますし、健康も悪化する。それから、自分の下の者を蹴落とすというような生き残りのマインドというのが非常に充満するだろうと思われまます。

ますます財政状況の改善がなされないままこのままいきますと、小さいパイの奪い合いが激化するであろうと思います。

また、既に起こりつつありますけれども、社会をさまざまな指標で見ていきますとだん

だん正規分布ではなくなって、フタコブになりつつあるんです。つまり、下の階層と上の階層に分かれつつある。それが 2050 年にはますますはっきりと分かれてくる。二層化してしまうだろうと思われます。それは例えば大都市であればゲッター化した地域とそうでない地域、それらから隔離された地域、例えば gated community など言われますけれども、門がついていて、門番がついていて、特別な人しか入れないような地域に分かれていくことが起こるだろうと思われます。

社会の底辺層の方々というのは、自分のポテンシャルを発揮するような教育や投資も受けられませんので、そうしますと労働力人口の中でのかなりのパーセントの人たちが自分のポテンシャルを発揮できない状況で、労働力から脱落していきだらうと思われます。既に子どもの貧困率は 15~16% ですので、6、7 人に 1 人の子どもは自分のポテンシャルを発揮できないようなリスクにありますので、これがますますひどくなるかと思われます。

ということで、現状を延長線上にしますと、かなり暗い将来になってしまいうんだけれども、それではない日本の姿というのはどういうものが出てくるかということで、これは実は昨晚の夜、考えていたんだけれども、かなりフリーにといいますか、こんなことあったらいいなという姿を書いてみます。

1 つは、日本の利点が生かされた将来です。日本は今のさまざまな貧困指標ですとか格差指標で言いますと、先進諸国の中でも 5 本の指に入るほど高いんです。ですので、それから見ますと既にかなり格差社会の問題、例えば犯罪ですとか児童虐待ですとか薬物依存であったりギャンブル依存というような社会問題が非常に顕著になっているはずなんだけれども、今のところそれがそれほど大きく出ていないんです。これはある意味では非常にアドバンテージだと思います。恐らく日本が格差社会になったのが比較的近年であったことから、60~70 年代ぐらいまでは比較的平等でしたので、その遺産がまだ残っているんだと思いうんだけれども、それを最大限に生かすことを考えていくべきだと思います。

既に諸外国においては格差の摩擦による暴動などが勃発し始めております。将来、諸外国では恐らくこれがますます激化するかと思われます。

日本でも勿論そのようになる可能性はあるんだけれども、それよりも今ある日本の特徴的な規律、秩序、安全が保たれたアドバンテージを最大限に生かして、住みやすい国、安全な国、平和な国、高齢者が生き生きと暮らせる国として、海外からも評価される国として存在していくことができるのではないかと思います。

また、政府が貧困等を削減する力を所得再分配機能と言いますが、日本は極端に低い状況にあります。ですけれども、逆に言いますと日本の再分配前、政府が介入する前の所得格差というのは比較的平等なんです。これは今、日本が先ほど貧困率は上から 4 番目と申しまましたが、それは日本政府の介入量が少ないからであって、もともと不平等であるからではないわけです。ですので、それを最大限に利点として高める必要があるのではないかと思います。

実際の姿として夢物語を書いてみます。簡単に御紹介いたしますと、国民のだれもが

個人の持つポテンシャルを最大限発揮できるような労働市場が確立していて、女性は勿論のこと、高齢者、外国人、精神疾患を含めたさまざまな疾病や障害を持つ人、また、育児や介助やボランティアなど、一定時間を割きたいという人など、すべてが自由に働けるような労働環境が整っていることが条件としてあるかと思います。そのためには職は非常にフレキシブルなものでなければいけません。

フレキシブルな一方で、賃労働に従事していないときには基本的に健康で文化的な生活を保障するというような、公的給付がなされることが理想かと思います。健康で文化的なというのは日本の憲法の 25 条に書かれている言葉でございます。

また、IT 技術等の発展により職場に通う必要性がなくなりますので、満員電車も過去のものとなり、仕事も国内だけではなく海外からも請け負えるような形になるのではないかと期待しております。そのためには海外からも発注されるような高い独自性、専門性を高めた労働力というものがつくられていなければいけません。そのためのキャリア教育ですとか職業教育を充実させていく必要があるかと思います。

貧困・格差の撲滅という点では、まず一番の前提条件として子どもの貧困が 2050 年には撲滅されていることを期待します。それがすべての子どもに機会の保障がなされることにつながっていくかと思います。

高齢化社会は高齢化率を見ると非常に暗くなってしまうんですけども、逆に言えば日本は高齢化社会の中で世界でのトップランナーなんです。比較的早い時期に高齢化になってきます。ですので、そのために対処しなければいけなくなっているのが、2050 年には既に高齢化社会になって久しい状況になっています。そのときにはさまざまな高齢社会を支える住宅や技術やサービス、例えば介護ロボットですとか次世代の福祉機器などが開発されていて、それが非常に大きな市場を占めるようになっていって、海外の社会もこれからどんどん高齢化していきますので、海外の消費者等にも非常に魅力的なものを提供できるようになっていることを期待いたします。

高齢者向けの市場というものが非常にそのころには熟成しており、このような進展というものが日本のみならず、海外の高齢者にも非常に魅力的になるということで、日本に移住したいというような海外からの高齢者も、誘致できるような状況になっていることが期待できるのではないかと思います。彼らは日本に来て居住することによって消費もしますし、そういう意味で税収入にも貢献するようになる。

子どもに関しては基本的に高等教育まで無償化されて、親の社会経済階層による学力や学歴の格差も解消されていることを期待します。そのためには、子どもは社会全体の責任という理念が浸透し、健全な発育のための費用というのは、例えば教育ですとか医療ですとか保育サービスの基本的な無償化が既に達成されていることが条件になるかと思います。

地域という意味では、安全かつ快適な住環境を整備することによって、日本のみならず海外からも移住者が増える地域づくりが達成されていることを期待いたします。

IT 技術等の発展により、外国で仕事しながらも日本に住むことを選択する日本人や外国

人が増える。また、人口の減少によって都市にゆとりができますし、地方に住むことが可能になる。勿論、地方の方もばりばり仕事していらっしゃるけれども、今は都市に集中しているという側面がありますが、2050年になれば例えば太陽光発電ですとかモバイル通信などさまざまな技術が発展し、ある意味で場所に縛られることがない働き方、住み方ができるかと思っておりますので、そういう意味で非常に自由にあちこちの地域がつくられていくのではないかと期待しております。

そのために何か必要かということですが、達成目標として私は4つ、今のところ考えております。

1つが子どもの貧困の撲滅。先ほど子どもの貧困率が15.8%とありましたけれども、2050年までに撲滅すること。少なくとも2025年までに今の半分の状況になることを考えています。

2つ目の目標として、女性の就業率を男性と同じレベルまで引き上げる。また、障害を持つ人の就業率をほかの人と同じレベルまで引き上げる。これは中には勿論、高齢者も含まれます。

3番目の達成目標として、健康で文化的な生活の保障ということで、今の生活保護制度では対応し切れていないさまざまな問題がありますので、これは新しい法律という形で対処するのが一番妥当かなと私は考えておりますので、生活保障法というものの策定を達成目標として挙げさせていただきました。

4つ目といたしましては、多様な働き方を可能とする技術の発展及び多様な働き方であっても、同じ権利を受けることの保障が必要ではないかということで、労働市場の改革を達成目標として挙げさせていただいております。

かなり夢物語的なものも話させていただきましたけれども、私の今の考えとしてはこのようなことを考えております。皆様からは率直な意見、感想なりをお聞きしたいと思っておりますので、後ほどマイクを回しますので、是非ともお願いいたします。

それでは、次に、委員の皆様から自己紹介を兼ねて御意見をいただきたいと思っております。今日は玄田委員が御報告して下さることを御了承いただいておりますので、お願いします。

○玄田委員

先ほど部会長から、やんちゃな議論をするようにというふうに言われました。それで皆さんもこれからやんちゃな議論をしなければいけないので、最初にできるだけやんちゃな議論をするように頑張ってみます。

2050年の姿はわかりません。わからないのでしゃべれません。

2025年は何となくわかります。今から14年後ぐらいなので、大体14年経つと正反対の方向に社会はぶれます。

98年から日本は別の国になりました。それ以前と全く違う方向に日本は動いています。ですので、2025年にイメージする大きな変化は3つあります。

1つは、若者が日本を捨てて出ていきます。先ほど年齢を聞いたら古市君は27歳だそうで、2025年には彼のような人間はもう日本にいません。27歳でベストセラーをたくさん書いて、頭もよくて、経営もできて、こういう若者はもう日本にはいないと覚悟すべきです。残ったのは我々年寄りが何とか日本を守る。かつて高度成長期に田舎が経験したことが、これから日本が田舎となって有為な若者は出ていきます。それはしようがありません。若者にしわ寄せをする国にしてしまったので、もう賢い子ほど出ていきます。これは覚悟するしかありません。けれども、それは案外楽しいことかもしれません。「まだ日本にいるの？」なんて若者が言っているような国になるでしょう。

2番目、男性受難の時代が続きます。もうこれから男はだめです。これも98年からはっきり日本で男はだめになりました。理由は簡単です。建設と製造がだめになってしまったからです。多分2025年にもほとんど戻っていません。

女性はまだいいです。医療、福祉は伸びます。今よりは労働条件がよくなるでしょう。男性も参入しているでしょう。けれども、男性はだめです。今、非正規雇用問題で大騒ぎをしています。おかしいです。こんなことは昔から大問題でした。なぜ今問題になるのか。男性が非正規雇用になるようになったのです。昔から問題があったのに騒ぐのは、男がだめになっただけです。これからは女性の方が楽しいです。男性はもうだめです。けれども、それはこれまで男性が既得権を享受してきたからで、これから我々は我慢するしかありません。

3つ目、郊外が崩壊します。多分、都会の中心地はもっと楽しくなります。コンパクトになって。田舎は田舎のよさがすごく出てくるような気がします。多分、多少は農業も変わるでしょう。問題はその中間の近郊とか郊外と言われるところは、言葉を選びますけれども、崩壊しています。高齢者もいなくなり、誰もいない寂しい場所になっているでしょう。けれども、それもしようがありません。多分無理です。一生懸命高度成長期にマイホームを建てた家が風化していくのを見るのは忍びないですが、もしかしたらちょっと楽しい社会になっているかもしれません。そんなにすごく悪いことだとは思いません。外れているかもしれません。

それが私の2025年の認識です。

あと10分ぐらい、幸福のことを25年後とか30年後を考えなければいけないのですが、今は幸福論ブームかなという気がちょっとしています。というのは経済が厳しくなるとGNPではない、もっと別の尺度がいいよねと必ず言う習慣があります。ですので、この幸福がブームで終わらなければいいなと思っています。

私は経済学を勉強してきました。私が学生するときには経済学では幸福なんか語れないと言われていました。そんなものは経済学で議論できない。だから価格とか量とか、ちゃんと測れるものを通じて人の幸福とか満足の在り様をちゃんと考えるのが経済学だと言われていました。それが今すごく変わって経済学者が幸福だ、幸福だと言います。

なぜそうなったかと言うと、人間はそんなに合理的な行動しているはずがないよなとい

う当たり前のことを、経済学者も気づくようになって、習慣、癖、心理みたいなものに注目するようになったからで、そうすると幸福も大事だよねとなってきました。極めつけはノーベル経済学賞の人たちが幸福と言うようになったからです。スティーグリッツとかセンとか、偉い人が幸福と言うようになって、幸福の研究が広がりました。私は、幸福というのに、申し訳ないですけども、少し距離を置いて見えています。

ただ一方で、気になることがあります。それは希望という概念であります。私はどちらかと言うと幸福よりも希望の方に関心を持っています。幸福と希望は全く違うものだと思います。幸福は、幸せな人は今の状態が続けばいいなと大体思います。新婚生活とか、子どもが産まれた瞬間とか、大体こういうときはみんな幸福だなと思います。そのときは今の状態が続いてほしいなと思うからです。古市君の本で、若い人が幸福だと思っているのはよくわかります。今の状態が続けばいいなという、あり得ないことだけれども、思っているからです。だから今の若者は幸福だと思いますが、希望はどんどん無くなっていると思います。

本来、若い人は希望があります。希望に必要なのは何か。最も必要なものは「時間」からです。若い人は時間という限られた財産が多く与えられているはずですが、けれども、こういう時間がたくさん与えられている若者から希望を奪っています。若者は幸福だろうと思います。しかし希望はどんどんなくなっていると思います。それは私たちの責任です。

では、希望を持っている人はどういう人かというのはわかりません。幸福な人はどういう人かも私はわかりません。内閣府のいろんな研究があるそうなので、是非教えていただければと思います。

ただ、わかることはあります。それはアンケートに「自分は希望がある」と答える人はどういう人かわかります。多分、自分が幸福であるという人は、どういう人かはわかると思います。

例えば希望がある人はどういう人か。1つは教育機会に恵まれてきた人たちです。中学校の卒業生、高校中退者よりは大学、大学院卒の方が未来に希望があると答える傾向は統計的にはっきりあります。「教育」はやはり重要です。

2つ目は「健康」です。自分は健康に不安がないと思う人の方が健康面で自信がない人よりは、未来に対して希望を持つ傾向がはっきりあります。ですので、幸福はわかりませんが、希望がある社会を目指すのであれば、やはり教育機会や健康、具体的には教育政策、医療福祉政策はとても大事だと思っています。

もう一つ、希望に大きな影響を与えるもの、特に日本人は「仕事」です。仕事がある人は仕事がない人に比べて希望があります。これはなぜか。日本人に「あなたの希望は何ですか」と聞くと、極めて高い確率で、特に男性が仕事にまつわる希望を語ります。自分らしい仕事がしたい。安定した仕事に就くのが希望。高い給料がもらえる仕事に就くのが希望。大体そういうふうに答えます。幸福と違って希望の世界調査がないのでよくわかりませんが、仕事が希望と思うのは多分日本的な特徴です。

ただ、最近ちょっと変わってきています。昔は圧倒的に希望と言えば仕事でしたが、今、少しずつ家族と健康の希望が急速に追いついてきているように見えます。ですので、ワーク・ライフ・バランスを国も積極的に推進していますが、ワーク・ライフ・バランスについては小室さんが頑張っている成果もあるかもしれませんが、国民は望んでいると思います。それは2000年代半ば以降の希望の変化です。多分、幸福とも関わっています。

希望に影響を与えるもの。微妙なのが収入です。お金はよくわかりません。お金が増えた方が、希望はありそうな気はしますが、実は調査をするたびに違う結果が出ます。300万円ぐらいあれば希望が増えるかなという結果が出るときもあれば、やはり1,000万円ぐらいないとなかなか希望がないと答えたりとか、お金はよくわかりません。どうも幸福もそういうものだと聞いたことがあります。ということは、お金は必要かもしれませんが、その稼ぎ方とか、お金が安定してあるかないか。一時的に1,000万円あるよりは、ずっと10万円あった方がいいとか。お金があれば希望とか幸福ができるかどうかはよくわかりません。

希望について、ほかに重要なものがあります。多分、幸福もそうです。先ほど資料を拝見して、福島さんの資料にも書いてある「コミュニケーション」はとても大事だと思います。希望を持っていない人が増えた理由は、先ほどのお金がないとか仕事がないとか病気の人が増えたのもありますが、寂しい人が増えたからです。希望がないと答える人はかなり高い確率で寂しいと答えます。お友達がいらない、信頼できる人がいない、本気で怒ってくれる人がいない。そういう人は希望がないと答える傾向が極めて強いです。以前、無縁社会とか言いましたけれども、それは希望とか幸福に密接に関わっています。

あとは「家族」がとても大事です。先ほどの部会長の資料で信頼という言葉がありましたが、子どものことと言えば、子どものときに家族に信頼されていたという記憶がないという大人は、未来に希望が持てません。そういう意味では家族はとても大事だと思っています。

希望の話を、被災地を含めていろいろなところで話をして気付いたのは、今、絆をいろいろなところで議論しますが、絆は1つではないということです。

社会学にWeak Tiesという概念があります。それは緩やかな絆という意味です。家族はStrong Ties、強い絆です。強い絆で結ばれた人間関係は安心感を与えてくれます。緩やかな絆はたまにしか会わないような、けれども、信頼で結ばれたような関係です。こういう関係は緩いから切れやすいですが、自分と違う世界を知っていることが多いので、非常にいろんなヒントや気づき、希望を与えてくれることがあります。私は希望が広がるにはWeak Tiesが必要だと思いますし、幸福や安心のためにはStrong Tiesが必要かなと思っています。

もう時間がないのでそろそろやめますが、そういう意味で幸福ということで考えると、やはり家族のことがとても気になります。家族の変容は止められないだろうと思います。今、最も多くなったのは単身世帯で高齢者、離別後だけではなくて、ひとり暮らしの若者

もものすごく増えていますから、多分これは変わらないだろうと思います。

そして、これはとても深刻な問題を含んでいるだろうと思います。場合によっては今、児童家庭というものがありますが、子どもだけの世帯というものがもっと当たり前のよう  
に増えるかもしれません。とても大変なことだと思っています。けれども、難しいのはど  
んな時代でも、2025年でも国や政府が家族に直接介入することはできないし、してはなら  
ないだろうと思うことです。ですので家族の問題に対して何か問題提起はできるような気  
がしますが、何ができるかは知りません。

ただ、1つだけ言えるのは、家族が支える時代は終わったのかもしれないということ  
です。他人同士で支え合う時代になっているのかもしれないかもしれません。そういう気がとてもします。

それはどういうことかということを見ると、よくわかりません。ただ、例えば1つ思  
うのは、子どもがもっと共同生活するようなことでいいのかなという気がします。小学生  
は家族から離して、平日は全寮生活をして、その平日は親も一生懸命稼いで、土日だけ子  
どもに会いに、寂しくなった近郊の全寮生活の学校にみんな行くようになって、週に1回  
は家族の愛情を確認し合って、平日大人はまた都会や田舎に戻って一生懸命働きに戻る。  
若者がいなくなった時代、残った人間が一生懸命支え合う。そんな必要性があるかなと。  
今、介護保険制度がなかったらどんなことになるだろうとぞっとしますけれども、同じよ  
うに他人同士が支え合うようなことをしないと、life も happiness も child もないのかな  
と、そんな感じがしています。

大変雑駁ではありましたが、ちょっとやんちゃな議論を目指してしゃべってみま  
した。

以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

それでは、順番に委員の皆様から自己紹介を兼ねて、もし今の報告についてコメント等  
あれば、そこで意見を賜りたいと思います。

順番はこちらから回っていく形でよろしいでしょうか。いきなり振ってしまっていていい  
ですか。よろしく願いいたします。

○古市委員

今、東京大学の博士課程で学生をしていて、友人とベンチャー企業をやったりしていま  
す。

多分、今日ここに呼んでいただいたのは、私が今、若者研究をしているからで、去年『絶  
望の国の幸福な若者たち』という本を出したことがきっかけで、この人に聞けば若者のこ  
とがわかるだろうと勝手にいろんな方が勘違いしてくださって、多分今日も勘違いして読  
んでいただいたと思うんですけれども、よろしく願いします。

お二人のお話をお聞きして、基本的に私も初め幸福部会の名前がすごく宗教っぽいなど  
思って不安だったんですけれども、ただ、この幸福部会の部会長のお名前をお聞きして、  
すごくいいなと思ったんです。どういうことかと言うと、子どもの貧困だとか障害者に対

するサポートだとか、すごいベーシックな貧困というか、国家がまさに扱うべきような最低限、一番弱い人、弱者に対する貧困を専門にされている方で、まず幸福どころという議論の前に、最低限のベーシックな貧困層、一番弱い人が貧困状況に立たれないことが第一だと思うんです。その面で幸福部会という場所で貧困研究をされている部会長が口火を切ってくださって、議論のベースになることはすごい納得しました。

その上で玄田先生の話はすごい面白かったですけれども、まさに私も2025年とか、更に2050年という社会が今の感覚で見たら絶望的になるかもしれないが、実はそこそこそれは楽しいのではないかという感覚は共有しています。

社会学では相対的剥奪と言うんですけれども、人々は幸福というものを社会全体とかマクロの状況と比べるのではなく、身近な関係とか、自分が見える範囲で幸福とかそういう価値観を比べると言われています。

つまり、どういうことかと言うと逆に経済成長期だとか、みんながどんどん豊かになっていく社会というのは、一般的に幸福度とか満足度が下がる傾向があるんです。みんなが豊かになっていくはずなのに、なぜか自分だけが裕福になれない。なぜか自分だけがキャリアアップできない。

逆に、みんなが貧しい社会というのは、例えば現在もそうだと思うんですけど、不景気な社会というのもみんなが不景気だから、別にこんなものでいいやと言って逆に満足しやすい状況が生まれてしまうんです。そういう意味で多分2025年が描かれたようなある種今の人から見るとディストピアみたいな社会、もしくは部会長が描かれたようなすごいディストピアのような社会というものは、実はそこに暮らしている人から見てみたら、そんな幸福度は低くないのかもしれない。生活満足度は低くないのかもしれないということがあるんです。

だから逆に言えば幸福度とか満足度というものを個人の問題としてだけ考えてしまうと、逆にどんな社会でもありになってしまう。その意味で希望学というものは、多分、希望というものを個人の意識ではなくて、希望というものは社会制度などによってつくられるもの。社会制度が希望というものを規定されることを強調されていると思うんですけれども、まさにその視点は大事だと思ったんです。

その意味で、まさに家族が担えなくなって、それが友人関係だとか仲間にしかな期待できないというのは、まさに私が逆に若者世代として実感していることでもあります。もはや家族だとか企業だとか、もしくは国などに対して、既存の共同体などに対してなかなか期待ができなくなっている。その中で逆に私自身も本当に友達ぐらいしか頼るものがないなと思っているんです。

1つのやんちゃなことを最後に言うておくと、政治家とか官僚の方にできれば、そんな頑張っほしくないんです。頑張り過ぎていろんなものを今まで抱え過ぎてしまっていて、逆にそれでいろんな規制が多くなったりとか、結局図体が大きい組織というのは経済が一方方向に成長する時代にはいいことだと思うんですけれども、逆にそうではない時代には図

体の大きさというものが逆に邪魔になってしまう。だから今まで余りにも大きく関わり過ぎてしまった政治家とか官僚の方が、自分が持っていたものをどンドン手放してほしい、頑張らないでほしいということ、私一個人としては思っています。

こんな感じで、済みません、ちょっと長くなってしまいましたが、ありがとうございました。

○福嶋委員 皆さん、初めまして。私は国土交通省から参加しております。 やんちゃな議論をせよとか、部会長からも楽しく議論をというお話をいただきましたけれども、私も皆さんといろいろ楽しく議論をさせていただければと思っておりますので、是非よろしくお願いたします。

私は国土交通省に入って8年目でございます、今は航空局というところで仕事しております。今やっている仕事というのは日本の空港を国が管理運営しているんですけども、なかなかビジネスの視点が入っていないというお叱りをいろいろいただいております、そこを是非風穴を開けて、日本の空港のビジネスチャンスを広げていって、世界の国々と戦っていけるような空港の在り方を目指している。そういうプロジェクトをやっております、まさに今通常国会に関連する法案を出そうとしている真っ最中でございます。

今回の部会に参加するに当たって、公務員の場合は公募型をとりまして、書類選考とか集団討論を経てここに今3人いるんですけども、選考途中で考えてきたことを幾つかお話ししたいと思います。

その前に1つ、部会長に御相談というか、今日全体のこの進め方と今後の6回なり8回の何となくのスケジュール感をどこかで共有できるといいかなと思っておりますので、よろしくお願いたします。

4点について申し上げますと、まず1つ目が幸福とは何だろうかということで、これは今、皆さんのプレゼンテーションをお伺いしてしても、いろいろ考え方があって、定義をするのが非常に難しいと思います。家族という言葉であるとか、信頼感であるとか、古市さんが友人というキーワードが挙げられておりましたけれども、幸福に作用するいろいろな要因はいろいろあって、一人ひとりによって考え方が違うんだらうなと思っております。

そこは何か1つの方向性にまとめ上げていくというのは、なかなか力の要る仕事だなと思っております、ある意味この部会は今までの日本の政治とか、政策の枠組みに対するアンチテーゼを投げかけようとしていて、非常にチャレンジングなことをやろうとしているのではないかと思っております。

なぜかと申しますと、2点目でございますけれども、幸福を目指す政策の条件を考えたときに、今の政策の体系とか政治の体系というのは、どちらかと言うとマスマーケットに作用する政策とか枠組みがとられてきたのではないかと思います。

私のいる国土交通省もまさにそういう名前がついているんですが、日本という社会を国土交通あるいは交通とかインフラという横串で見るとあるような政策の枠組みになっていて、では、その先にいる個々人がハッピーに感じられるかどうかというところを、そこまで各個

人の顔を見ながら考えて仕事をしているかという、なかなか難しいところがあるなど日々感じております。そういう意味で個人の幸福あるいは主観的にハッピーだなと思えるようなところを高めていくことになっていくと、ある特定の人を思い浮かべながら、その人が本当に幸せになるためにはどうしたらいいんだろうかという、まさにバックキャストイングと言うのかよくわかりませんが、結論のところから逆算して考えていかなければいけないと思っております。

そういう意味で、私は選考過程の集団討論の中でも申し上げたんですが、特定の人、誰か個人にスポットライトを当てて、その人がハッピーになるためにはどうしたらいいんだということを徹底的に考えてみるというのも、解決策をモデル化していくときの1つの思考方法になるのかなと思っております。それが2点目でございます。

3点目は2050年という条件の設定についてです。私も玄田先生と同じで全くイメージがわからないと思っていたんですけども、部会長の御発言を聞いてみると、2050年は要は自分たちの子どもが私たちぐらいの世代になっている時代であるとおっしゃっていただいているほどなという気がいたしました。私もちょうどこの間、結婚したばかりでございまして、そろそろ子どももと考えているんですけども、そうなるのかな自分にとって身近な問題であると結び付けて考えなければいけないと思っております。そういう意味で特に子どもたちにどうあってほしいかということをご一緒に考えながら、議論を進めていきたいと思っております。

最後に4点目でございますけれども、今回の提言をどう落とし込むかということが非常に大事な点と思っております。私も役人をやっておりますと、実際に提案を受け止めて、それをどういうふうに社会に反映させていくのかというのは日々難しいと思っております。今日御欠席ですけれども、部会長代理の方からいただいたペーパーの最後に書かれておりましたが、提言を実際に社会に落とし込むための戦術とか戦略といったものを、しっかり考えていかなければいけないだろうと思っております。

提言というものは発信する人だけで成り立つものではなくて、それをちゃんと受け止めて消化できる人がいて、初めて成り立つものだと思います。提言を出しただけではなくて、それを受け止める人のことを考えながら、我々としてプレゼンテーションをしていかなければならないのではないかと思いますので、実際に工程、この提言をどういうふうを実現させていくのか、だれに任せるのかということも考えながら議論を進めていかなければいけないと思っております。

雑駁でございますけれども、以上4点を御報告申し上げます。皆さんどうぞよろしくお願いたします。

○福島委員　私自身は目と耳に障害がある盲ろう者といいます。英語ではdeafblindと言います。

昔から「先生と呼ばれるほどのばかでなし」という川柳があるんですが、先生はやめてここでは「さん」とします。一部の人だけが先生と呼ばれるのはよくないので。私自身も

ですが、大学というところにいると早口でしゃべってしまう。あるいは例えば少なくとも東大の学生は頭の回転だけは速いので、空回りもありますが、早口で言っても通じてしまう。だけれども、途中でついていけないとおっしゃった委員もいらっしやった。これはスライドのことかもしれませんが、私はスライドも見えないし、パワーポイントも事前に見ることができなかつたので、単に音を指先で聞いているだけなので、どこまで理解できるかわかりませんけれども、たくさんのお話を圧縮してぱっと伝えるというのは今の高度情報化社会の典型ですので、まず部会長にはなるべくわかりやすく、語数を減らす。たくさん言えればいいということではないので、それを心がけていただきたいと、そうでないと結局、研究者の集まりみたいになってしまうので、そんなことで私自身の紹介のようなことはまた別のとき、プレゼンのときにさせていただいて、せっかく今お二人からプレゼンをいただいたので、質問をさせていただこうかと思えます。

まず部会長に、格差の問題をお話になって、日本が非常に格差を抱えているという点。格差はあるんだけど、案外問題は表面化していない部分もあるというお話もありましたが、やはり将来的には例えば大都市においても、安全な場所とそうでないような場所が門で仕切られたりするような、こういうものはSFにはよくあるんですが、私はSFが好きなんですけれども、そういうことを考えたときに1つ伺いたいのは、ではどんな国が理想とおっしゃるか。よく言われるような例えばデンマークのような国をイメージなさって、そういう高福祉高負担の社会を目指すことを理想となさるかというのが1つ目の質問です。

もう一つは、格差をなくしていくことを考えたときに、格差がない比較的平等な場合でも2通りあると思うんです。つまりみんなが裕福だ、みんなが金があるというような国、どんな国があるかわからないんですが、例えば産油国の一部とか、クエートとか、よくは知りませんが、ルクセンブルクとか、1人当たりのGDPがすごく高い国が一方である。

他方で、余りお金はないんだけど、そこそこみんな幸福なんだということで注目されているような国。ブータンであるとかキューバです。キューバなんかも一方でカストロさんの独裁だと言われながらも、案外市民の方はハッピーだと言っているような話も聞いていますので、そういう格差の対概念は平等かもしれませんが、平等の中でも豊かな平等を目指すのか、貧しくても平等を目指すのか、あるいは別の形の平等というものがあるだろうと思えます。

玄田さんが名前を出されたアマルティア・センなど、ノーベル経済学賞をとられた人なんかはインドの貧しい層を調査なさったんですね。私は専門ではないんですが、障害者との関係で似ているなと思ったのは、自分がすごくひどい状況にあると、何か困っていることはありませんかとか、貧しくて大変なのではないんですかと言われたときに、自分はこれでいいんです。私はそこそこやれていますという感じになってしまう。障害者も似たことがあって、あなた障害があつて大変でしょう。何か困っていませんかと言ったら、そんなことはありません。私は障害があるけれども、そこそこ元気に家族とやっているからいいんです。これ以上皆さんには御迷惑をかけませんというような、言わばニーズの潜在化、

引っ込めてしまう傾向が人間にはありますから、本人が望まないからそれでいいという問題なのかということがあると思います。

ということで、部会長には理想の国としてイメージなさっている国はどこかあるかということと、もう一つは格差の小さい状態でも幾つかのパターンがあると思いますので、どういうパターンを目指していらっしゃるかということが質問です。

玄田さんにも次回と次々回は御欠席ということで、伺いたいのですが、2050年はよくわからないけれども、2025年はイメージできるというお話とか、若者がいなくなるというのはすごく面白いと言ったら悪いですが、刺激的な議論だろうと思います。

伺いたいののは、優秀な若者は日本を出ていくだろう。じゃ、どこに行くんですかということ。中国ですか、アメリカですか。

○玄田委員 多分アジアでしょう。中国ではないかもしれないです。

○福島委員 アジアのどこですか。

○玄田委員 ブータンではないでしょう。多分これから発展していく国ではないか。2025年は中国は相当大変なのではないでしょうか。高齢社会が相当深刻化しているから大変なのではないか。インドかもしれないけれども、インドもわからない。インドネシアかも。

○福島委員 インドネシアも1億以上いますね。インドは10億ぐらいいるし。

○玄田委員 ではアフリカに行こう（笑）。

○福島委員 もう一つ、2つ目は希望ということをおっしゃられていた。希望というのはすごくいい言葉だと思うんですが、私がすぐ考えたのは、私たち日本人が使う希望というのは必ずしもいい文脈だけではなくて、例えば「希望的観測だ」と言うときは、それは楽天的に言っているだけであって、余り現実的な観測ではないのではないかというときに使います。あるいは例えばパンドラの箱が開いて、世の中に悪いことが広がった後に、最後に「希望だけが残った」と使われたりする。焼野原でも希望だけはあるよね的のところがあって、現在ハッピーだ、幸福だと言うのと比べると、かなりあやふやな感じがあるので、希望はハッピーに対抗できないのではないかという気がするんです。

○玄田委員 希望は去年の3月11日以降、すごく使われるようになった言葉です。それまでは「希望がない」と言われていました。「希望を持とう」というのは3月11日以降です。調べてみると、阪神・淡路大震災の直後も希望とよく言われている。もっと調べると希望という言葉と物すごく強い関わりのある言葉は、実は「水俣」なんです。水俣病の後に希望はすごく言われるようになりました。

つまり、希望は悲しみの概念なんです。夢と希望が違うのはそこです。本当に希望を求めている社会というのは、大変な社会なんです。

それから、先ほど福島さんがおっしゃったように、日本語では希望という概念はもともとありません。仏教の用語の中に希望はありません。多分、希望は近代以降の用語です。英語でhopeというのは動詞で使うでしょう。日本語では希望するとは余り言いません。「たし」「まほし」の文化です。だから希望というのは日本語ではまだまだよくわからない概念

なんです。だけれども、おっしゃっているとおり希望を求めている時代はどちらかと言うと不幸な時代です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

私にも質問が課せられていると思いますけれども、お時間も押していますので、また、この点は次回以降の議論にも生かさせていただきたいと思いますので、次の委員、お願いいたします。

○野口委員

いろいろとお話を聞いていまして、格差社会という話が大分あって、要するに格差社会が広がれば広がるほど不幸になっていくということがあったと思うんですけれども、いろんな国に実際行きまして、例えばネパールなんかもそうですし、途上国によく行くんですけれども、まさしく日本以上の格差社会です。

その中で本当に今、彼らが不幸な顔をしているかという、意外とそうでもない気がするんです。例えば日本はみんな学校に行けている。義務教育がありますので中学校までは行けています。みんな学校に行っている子どもたちが幸せで、学校に行けていない子どもたちがそうでないのかと言うと、いろんな国に行くとき表情だけを見ても、意外とああいう貧しい国の子どもの方が実は生き生きしたり、夢を語ります。例えばネパールに行って学校なんかほとんどないところでも、将来あれになりたいとか、学校に行っていないのにパイロットになりたいとか、現実的でないかもしれないですけれども、夢を語ります。逆に日本に帰ってきて学校なり、それは私学の優秀な学校に行っても、逆に夢を語らなくなってきたところを非常に感じます。

あと、私なんかは環境学校みたいなことをやっているんですけれども、大体環境学校とかそういうところに来る子どもたちというのは裕福な子どもが多いんです。親がそういうことに関心がある。そういう子どもたちが集まってきますけれども、先ほど玄田先生がおっしゃった団体生活とか全寮制というのはすごくわかるんですが、例えばいろんな子どもと山に登っている。ある私立の優秀な学校の女の子でしたけれども、環境学校はいろんなところから子どもが集まるので、みんな初めて同士の子も子どもたちが集まるんです。ある優秀な女の子は非常に勉強ができる。その子はなかなかほかの同級生と会話をしようとしなない。なぜコミュニケーションをとらないのか聞いたら、彼女はしきりに私は勉強ができるということを一生涯懸命アピールするので、それは質問に答えていないなと思いながら、どうして友達をつくらないのという話をしたときに、彼女の中では自分より周りがばかに見えるみたいな、そんなことをしゃべるんです。

その次の非常にみんなで山に登ろうということで富士山に登ったんですけれども、6合目、7合目、8合目まで行くとだんだんきつくなるんです。8合目辺りからだんだん高山病が出てきて何人か脱落するんです。その後、後ろから私はずっとみんなの後ろを追っていくんですけれども、山頂直下ぐらいになると、面白かったのは子ども同士が勝手にコミュニケーションを始めて、もう少しで山頂だとか、頑張ろうというかけ声が自動的に始ま

るんです。

私は友達に要らないと言った女の子はその中にいるんですけれども、声を出さなかったんです。ところが、登頂して下りてきた日の夜に私のところに来まして、実はあのときにみんなが声をかけてくれなかったら、私は登頂できなかった。要は登れなかった。実は友達というのは大事なんですねみたいなことを、ごく当たり前のことなんですけど、そういうようなことを何となくああいう共同生活の中で感じたりとか、うまく話がまとまらないんですけれども、例えばネパールの学校なんか非常に貧しいんですが、貧しい中でみんなが知恵を出し合ったり助け合ったり、いろんな工夫をしたりする。逆に私は日本は決して貧しい国とは思っていませんけれども、日本のように裕福になってきたときにそういったものがなくなっていくのかなという気がします。

1つこれは教育なのかなと思ったんです。その教育の中でいろんな学校をずっと回っていますと、日本で一番まずいなと思うのは教育現場を回ったときなんです。

例えば私のところに大学生もたくさん来ますけれども、何をやっていいのかわからないとか、夢を持ってないとか、目標がわからないとか、そういう質問がすごく多いんです。自分たちは社会の一員で、自分たちが社会の一員の中で何ができるかとか、幸せを感じるというのは多分そういうことだと思うんですけれども、自分たちは社会の一員として何ができるかというところに、なかなか目標が持てないのかなと。それは大学なんかに行っても例えば1列目、2列目、3列目ぐらいは大体留学生なんです。あとは女の子です。講演をした後もみんな手を挙げて質問をする。そこから後ろが日本の男の子でぼうっとしている。

例えば今いろんな活動をしていますけれども、環境活動もそうですし、環境とは関係ないんですが、例えばフィリピンとか沖縄での遺骨収集などをやっている。こういう活動は若い人にはなかなか届かないのかなと思ったんですけれども、意外と集まるのは大学の女の子です。

いろいろしゃべっていると社会の出来事に対して関心がある。社会の出来事に関心があるからもっと調べて勉強したいとか、例えばボーイスカウトがあります。日本はボーイスカウトがぐっと減っているんですけれども、その1つは塾が一番の敵だと言われていて、要するにすぐに結果に出る教育。塾に行けばすぐ成績が上がるとか、受験にプラスになるということで、みんな塾に親が行かせたがる。そのボーイスカウトのような活動は決してプラスにすぐならないとか、勉強ができるわけではないということで優先順位が下がるんですけれども、ただ、結果どういことが起きているかということ、ボーイスカウトはテントを張るだけではなくて、その地域で自分たちが何ができるかということをもみんなで案を出し合って、例えば班長も定期的に変わるんです。例えば放っておけばリーダーシップをとる人がリーダーシップをとるんですけれども、定期的に班長を変えていくので、日ごろ手を挙げない人もリーダーシップをとらなければいけない。それで地域で何ができるかといういろいろな活動をしているうちに、結果的に社会の出来事に関心を持ってきて、社会の出来事に関心を持つと自分から調べて勉強したくなっていく。ですから、逆にボーイスカウ

トというのは学歴とかにはマイナスになる言う親が意外と多いらしくて塾を優先するんですけども、ボーイスカウトに行っている子どもたちの方が結果的に高学歴になっていくことがあるらしいんです。

ですから、すぐ目に見える教育、結果がすぐ出る教育も大事かもしれませんが、結果的に10年、20年経ってみて影響してくる教育も含めていくことが1つの幸福なのかなとか、そんなようなことを感じていました。

話がまとまらなかったんですけども、済みません。

○阿部部会長 ありがとうございます。

○新田委員 よろしくお願ひします。山形の酒田というところに本社がありそこを拠点に事業をやっております、今日は朝7時の飛行機で参りました。山形は昨年同様、雪がものすごく多くて、たまに飛行機が欠航します。欠航のときは欠席せざるをえず「申し訳ありません」という覚悟をもって今日の朝の1便で参りました。

養豚は父の代から初めました。昨年暮れ日本経済新聞の「人間発見」というコラムで取り上げていただきました資料を入れていただいております。実際の私以上に大変良くまとめていただいております。お読みいただければありがたいと思います。

先ほど部会長に見栄を張りまして子どものことと言いましたけれども、今年55歳になります。実は孫の心配をしようかなと思っておりまして、そういうことを考えながら楽しくこの部会に参加させていただこうと思います。

豚肉についてなんですが、数年前に豚肉健康法という本をつくりまして、豚肉は非常に体にいいぞということをごっすりまとめております。次回以降、都合の良いときにその本をお持ちしようと思います。その本の中には豚肉の中にはアナンダマイドという物質が含まれており人を至福にするとも書かれております。豚の可能性を探るということで毎日試食をするわけですけども、手前味噌ですが弊社の豚肉はおいしい。この試食の時間は至福の時だとなるわけです。やはりそれも今回のテーマである「いつも、すごく幸福だなと、至福だなと思って食べます」ということを心から言いたい。私は非常に楽しく生きている人間の1人だと思いますので、できるだけそういう時間をたくさん持てるようにしていきたい。

弊社の豚肉の生産は、北海道から栃木まで直営農場とグループ農家で60か所ほど農場があります。日本のほぼ1%強のシェアであり、豚肉は年間約1500万頭を日本で生産します。そのうちの20万頭弱をブランド豚として弊社で生産しております、平牧三元豚、金華豚という2つのブランドです。三元豚が特に最近知られるようになってきたんですが、東京であればミッドタウンとか銀座、日本橋などにお店を出しておりますので、是非おいしい豚肉を召し上がりたい方は、この部会の後、お昼ごはんが待っているものですから、ひとこと言っていただければと思います。

今回のテーマは「生とか死とか幸福」という普遍的なテーマなんだろうと思っております。55にて、私みたいに能天気な人間はくよくよせず、ゆっくり生きたいなと思っております。55に

もなるとこれから先の余生をどう生きようとか、どう死のうとかと最近そればかり考えるようになりました。私はドラッカーが大好きで、やはり人というのは社会に貢献すべきなんだ。生きていく上では「基本と原則が極めて大事である」と教えてくれます。おいしい豚肉を皆さんに提供して食べていただいて健康になっていただく。それでお客様にハッピーになっていただく。

豚の命をいただくわけですから大事に育てたいとおもっています。おいしいと思って残さずに食べてもらえるように、もったいないと思って食べていただけるような豚をつくりたいといつも考えて生産するようにしています。最近ではブランド豚といわれるようになり少々高めなんですけど、一番高い豚は純粋金華豚という豚肉でロースが 100g1,200 円で販売させていただいています。おかげさまでいつも売り切れます。最近、日本の景気は非常に調子が悪いんですが、その中でもそういう豚肉大ファンの人たちもいらっしゃいます。また、三元豚は手頃な価格で提供しておりますので、できるだけ皆さんに食べていただきたいと思います。

日本のことを長期的に考えると 2025 年、2050 年の話題をするのが果たして現実的かなと思うほど、非常に財政的には厳しい。民間の我々の会社であれば、まず日本の資産を負債にあて、債務を出来るだけ圧縮してから再生に向けて始めるのが社会常識であると考えます。債務超過国家ですから国民の預金で暮らしている国をどう考えるかということに尽きるわけですけども、大阪維新政治塾は 400 名の定員に 1,000 人以上（最終 3,326 人）の人が応募したということが、非常に民意を物語っているんだろうなと考えています。

そんなことも含めて、我々の活動は幸福に寄与するよい食活動を豚肉を通して実践していきたいと考えます。食べ物は無添加で国内自給向上のために地産地消の食べ物を食べ、食べ物が健康に寄与することが一番です。一步外に出るとお店に入っても何を使っているかわからない店が多いものですから、まずは「無添加の素材で国産のものをたくさん使っている店ですよ」というマークが店についている。私の胸のバッジもそうなんですけど、そういうお店をたくさんつくろうという活動もしております。是非インターネットで見させていただいて、いろんな意味で楽しく社会に寄与できる活動にしていきたいと思っております。

発表がいずれあるそうですので、それも楽しみにさせていただきます。よろしく願いいたします。

○阿部部会長 ありがとうございます。

○永田委員 新日本科学という企業のトップをしております。30 年ぐらいかけて 30 人ぐらいの会社を二千数百人の一部上場の企業に育て上げたんですけども、一方で先ほども出てきましたが、ブータンの名誉領事を拝命しております。頻繁にブータンにも行くのですが、GNH は GDP に代わるということで、この GNH の概念を御紹介できればと思っております。

ティンレー首相は、日本人というのは快樂と幸福を混同しているとよく私におっしゃいます。何でブータンが世界一幸せな国だと言われているのか。実態としては子どもが死ぬ

んです。私は医師でもありますので、医療あるいは酪農を通じて、ブータンの子どもたちの死亡率を下げていく活動を、今、日本企業として初めてブータンに企業を設立しまして行っております。実態としては非常に貧しいです。離婚率も非常に高く、母親は仕事がないので子どもを学校に行かせられない。実態としてはそうなんです、教育もただですよ、医療もただですよと表向きはなっていますが。ではその人たちは本当に不幸かということ不幸ではないんです。幸せだと言うんです。幸せの定義が違うんですよ。

私は実は高野山大学院を出ていまして、仏教では快樂というのは般若心経にも書いてありますけれども、5つの神経、5感の一時的な刺激、要するににおいをかいだり、何かを食べたり、見たり、こういうものは永続性がないんです。要するに一時的なものである。しかし、幸せというものは自分の内側にあって、本当に静かな湖面のように永続性のあるものだと仏教だと定義されています。ブータンは実は仏教の国で、なぜ幸せかという根源はそこにあるんです。

最近、国王が来られたときに私は本を書きまして『“幸福の国”ブータンに学ぶ幸せを育む生き方』という本で、この中に幸せの定義とか詳しく書いたので、よろしければ差し上げます。

先ほど医師としてと言いましたけれども、私は日本の医療は世界一進んでいるというか、患者の視点から考えて、一番いいと思っています。ですから、余り悲観的になる必要もないのではないかと考えています。

一方で、学校法人の理事長も兼務していまして、幼稚園とか保育園を通じて子どもさんとか親御さんと話す機会がよくあります。そういう中で今後の教育というものを真剣に考えていかなければいけない時期に来ていると思っています。

また、TOEICの役員もやっています、日本人の英語のレベルが非常に低いんです。アジア31か国中28位です。世界では百数十番目になるんですけれども、ブータンはバイリンガルで全員英語を話せるんです。そういうふうに英語のレベルを上げていくというのが国際的に、外に出ていくということも先ほど出てきましたが、やはり日本が国際的な地位をしっかりと確立する上では大事かなと思っています。

私も20代のころから海外によく行っていまして、今も大体月の半分から3分の1はアメリカ、アジアを中心に出ています。そういう視点で海外と日本の比較を頻繁にやっているんですけれども、日本のいいところはたくさんあるんです。ただ、いいところがあることを日本人が知らない。悲観的になることは全くなくて、いいところを伸ばしていけばいいのではないかと考えております。

今お話をしているいろんなことをやっている変な人だなと思ったかもしれないんですけれども、今後、30年近くの社会経験がありますので、そういう経験を生かして若い人たちと議論していければいいなと考えております。

○小室委員 どうぞよろしく願いいたします。

私は株式会社ワーク・ライフバランスという会社を経営しています。今、丸5年になる

んですけれども、同時に私の長男が5歳です。私は子どもを出産して3週間で復帰して、今の会社を起業したという形で、子育てと会社育てを同時展開でずっとやってきているような形です。

社名もワーク・ライフバランスなので、女性の育児支援みたいな仕事をしているというイメージをよく持っていただくんですが、実際にはワーク・ライフバランス社の本業は企業の労働時間改善のコンサルティングがメインです。今まで800社以上の企業さんのコンサルをしてきて、その中で見てきた企業の実態を見て感じることは、日本人のビジネスパーソンは極めて優秀で、非常に孤独な人たちの集まりという職場になっています。物すごい高学歴の人が集まって、すごい長時間労働をしています。でも、それは一たび人に協力し合って共有して進めれば、残業しないで済むような業務がたくさんあるんです。でも、人を信じない。自分の能力でやり切ろうとする。かつ、労働時間に関しては自分は望んで残業していると思っている方も多いです。決して残業したくないのにさせられているのではなくて、これにやりがいを感じているから残業していると感じている人も多いんですが、実際には時間に制限をつけずに仕事をすることによって、最終的には時間で解決すればいいので人に頼らない。なので結局仲間と助け合わない、信じ合わないという非常に孤独な職場が多くなってきています。

私たちは当然、企業から御依頼されて、残業を減らすのがミッションですから売上げを上げて残業を減らすためにコンサルに入るんですが、最初は物すごい抵抗されますけれども、コンサルをしていく中で労働時間は減って、売り上げは実はほとんど変わらないというか、30%とか50%残業を減らしても全然売り上げは下がらないんです。でも、一番大きな変化はすごく幸せそうになります。それまで人に頼ることがなく自分でやっていた方が、人に最初に物を頼んだりするのはとても屈辱なようなんですが、助け合える職場になると初めてチームで仕事していると思いましたがと言ったりだとか、仕事をしていること自体が幸せという状態、楽しいということをおっしゃって、最初は人も減らされているのに労働を強化させるみたいな形で非常に反発されていた方たちが、こうやって協力し合ってチームワークで仕事をするということなんですってというふうに変化をされます。

私は労働時間という問題をすごく大きな日本の課題だととらえていまして、これを変えることによって日本の大きな問題というものが多々解決すると思っています。今後このままいくと日本の社会はどうなるかというお話がありましたが、私が思っているのは、このままの社会でいくと24時間仕事をしようと思ったら、親がちょっとでも要介護になったら、要介護度1のうちから24時間型施設に入れるというような、本来は1や2だったら居宅介護で見られるんですけれども、自分が帰れないとなったら24時間どこかに入ってもらわないと、つまり姥捨山が必要という発想にならざるを得ないですし、保育園も夫婦ともに帰れないんだから深夜保育まで全部やってもらわないとという話になって、当然、夕食を一緒にとるなんてこともなくなりますし、今、既に起きていますけれども、しつけも宿題も全部学童保育でやってくれないとという世界に入っていきますし。

若者は一見、時間制約がなさそうなんです、本来は若いエネルギーと力があればボランティアだとか地域への貢献が本当はできるんですけども、それもできないというか、仕事のせいでできないと思ってやらない状態に入っていくので、あれだけの震災が起きてもゴールデンウィークにしかボランティアに行かない、行けないというのは何なんだろうと思ったのですが、そういったボランティアにも一切時間を割けないという国ができ上がるんだろうなと思っています。

この労働時間というところをいかにして変えるか。これによって本当に6時以降の時間さえあれば親の介護にも、その人だけがやるべきではないですが、納得いくまで携われたりだとか、保育の問題も最低限の保育時間の中で仕事との両立ができたりだとか、さまざまな本来やりたいと思っていたこと、でも、既にその希望も忘れていたような状態を取り戻すことができるのではないかと考えています。

先ほどの阿部さんと玄田さんの発表に関して、私がすごく共感して思ったことなんです、先ほど介護に関して今後グローバルに打って出られるという話をされていまして、私は非常にそこに共感をしております。この日本の高齢化率ぶっちぎり1位のところに、後で物すごい追いついてくるのが中国と韓国だと思うんですけども、速度も速いので日本のような準備期間もなく突入するので、恐らく日本の商品、サービスを買うと思います。

でも、そのときに買うのは介護される側の方ではなくて、私が思うのは介護と仕事を両立しなければいけない世代の方たちが、その両立のサポート商品をすごく求めると思っています。日本も今後、介護商品と言うと介護される側の商品にばかり目が向いているんですけど、実際には非常に苦勞するのは介護と仕事を両立する、特に団塊ジュニア世代なんですけれども、この世代は本当に仕事も夫婦でやっていかなければいけないし、介護もしなければいけない。それを支える在宅勤務だとか、さまざまな商品、サービスはこのまま全部アジアに輸出できるという意味で、非常に日本の強みも生かせる商品も多いと思っています。

玄田さんのお話の中にあつた緩やかな絆の話なんです、本当に強い絆の家庭と緩やかな絆の関係があるというのは、お話を聞いて本当にそうだなと思い、その緩やかな絆をどれだけ持ち続けて、いざというときに関係を持てるのかということがその人の豊かさだったりとか、迷ったときに苦しさから救われるということにすごく関係しているなと思って、これ自体が本当に時間がなければ不義理をするというか、時間がない労働時間だらけな方だというのは、この緩やかな絆を全部仕事という名の下に切ってしまってしまっている社会なので、これが復活することによって非常に希望、幸せというものに近づくんだろうなという共感を持ちました。

この後、次回などに発表の時間をいただけるそうですので、私の側面からは労働時間を中心とした提言をしたいと考えております。

以上です。どうぞよろしくお願ひいたします。

○小宮委員 よろしくお願ひいたします。

いつも後ろに座っている立場で、真ん中でしゃべるのは緊張しています。また、皆さんはインターネットで検索すれば経歴などがわかる有名な方たちばかりなので、私は本当に自己紹介しないとわからない者ですので、丁寧に自己紹介をしたいと思っています。

私が農林水産省で今やっている仕事は、BSEの問題などを扱っている消費・安全局というところで直近では有害物質を含んだお米が世の中に流れてしまったことがありそういうものを流通させないようにするような仕事をしております。

ただ、そもそも農林水産省に入ったのは、私自身、福岡の田舎が出身で、大学は東京に来たのですが、毎回実家に帰省するといつも地域が元気なくなっているなどというようなことをずっと思い続け、私の生まれ育ち感謝しているこの地域をどうにか元気にしたいという気持ちがあったからです。ですので、地域の活性にすごく関心があります。

一方で、留学に行く機会もあり、海外から日本を見る機会を得て、アメリカの友達からは、日本は国自体がビバリーヒルズみたいに非常に裕福だとか、医療も発展している、とても清潔で便利という印象を持っていることを聞きました。ですので、日本も自信を持たなければいけないんだなと思いつつ帰ってきて、特に、私たちの身近にある地域に自信を持って良いところがあるのではないかと、気づいていないだけなのではないかとより思うようになりました。

また、この会の幸せというテーマについてですが、今回公募させていただいた中で、幾つかの部会のうちどれに公募しようかと思ったときに、自分で何か気持ちが入り、考えたいと思えることから幸せの部会に応募しました。

ただ、幸せが何かはとても難しい問いだなと思います。幸せって何だろうと考えたときに、まず非常に主観的な観点から御飯を食べているときかなとか、友達と話をしているときかなとか、家族で仲良くしているときかな等と感じました。また、2050年のことは余りイメージできないですが、2050年になって突然牛になるわけでもなく、人間は人間のままだと考えるとやはり具体的な幸せをイメージし、その後、それが実現できない問題点は何なのか、それが制度なのか、単に気持ちの問題なのかとかといったアプローチが必要なかなと考えました。

もう一つ、行政の中で仕事をしているのですが、国で何をやるかという中で資料4でガバナンスの変化とありましたが、参加型合意形成の仕組みが発達するだろうということには同感します。留学で学んだ中で、最近のリーダーシップが、ビジョンは必要なのでしょうが、トップダウン型からスチュワードシップ、サーバント・リーダーシップへと変わってきているそうです。まさに、相手の希望を把握しながらリーダーシップをとってものようですが、行政もこのような形になっていく必要があると思います。みんなが思っている具体的な幸せって何なのかを把握し、それを取り込んでいく方法は何かを考えるアプローチを検討する必要があるかなと考えています。

○國光委員　私も自己紹介をさせていただきますと、今、所属は独立行政法人国立病院機構本部となっているのですが、もともと厚生労働省の職員でございまして、若手

の公務員枠ということで今回参加させていただきます。第一人者の皆さんとお話させていただくので非常に恐縮しておりますが、よろしくお願いいたします。

私の経歴も踏まえて、どういうふうに幸福部会にコミットしていきたいかということをし少し述べさせていただきます。

もともと私は医師をしております、医療現場でいろいろ患者さんと向き合ったり、家族の方とお話をする中で、医療現場が、医療崩壊という言葉が皆さんも聞かれたことがあるかもしれませんが、例えば医療の質の確保や、医師の偏在により医師がどんどん地方にいなくなり病院がつぶれてなくなっていて、住民がそれに非常に反対しているという構図があったり、現場では医療費が足りない肌感覚がある一方、マクロでみると医療費がどんどん増加していて、財政もかなり圧迫しているという状況があったりもしているわけです。これらに現場で非常に問題意識を持ったのですけれども、現場での努力は当然なのですが、もっと仕組みから考える必要があると思ひまして、厚生労働省で医療政策に携わって仕組みの方から考えていくのはどうかと考えた次第です。

現場で医師をしていたときは、厚生労働省にいろいろ問題があるのではないかと恐縮ながら思っていた部分もあるわけなのですけれども、実際、入ってみると随分見方が変わりました、政府の皆さん激務の中、必死で努力されていることも強く感じました。しかしその中で、いろいろ障壁になっているものがあるわけです。

それは一つに、社会保障の給付と負担の関係だと思ひまして、やはり給付に見合うような財源の確保、つまり税や保険料などによる負担が伴っていないと思います。また、社会保障全体の中でも給付のアンバランスがあり、他委員の御発言にもあったように、高齢者に比べて子ども、子育て、労働などに給付が少なく、少子化、これが根源的な問題と思ひますが、それを助長していると感じます。

それと、もう一つは、決断ができないということです。ちなみに、今回の幸福も将来の在り方という点も、恐れながら私自身は、今まで以上の奇策といいますかウルトラCのアイデアが出てくるとは余り思っておりません、最後は今までの延長線上に近い答えに行き着くのではないかと思っております。物事を詰めていくとどうしてもある程度中庸な答えになっていく。今回やんちゃな議論をせよということで大きく騒いでも、最後に結論を詰めてまとめたときには、それほど奇策はない、むしろ当たり前のことになるのではないかと思っています。ただそこで、一番の問題点は、今までこういう政府の部会やそれ以外のところで、皆さんが多事争論されている中で、論点は出尽くしているのだけれども、それを結局決め切れていない、決断力の問題ではないかと思ひています。やはり論点をいかに先送りせずに決断するかということが、一番今の日本に問われているのではないかと思ひています。

私自身、すごく日本はいい国であって、海外に行っても日本は本当に安心で安全で便利という素晴らしい国だと改めて思ひます。この日本をもっとよくしたいですし、今の中高年の方や私が子どもの頃ぐらいまで感じていたような幸福感を、私も子どもがいるのです

けれども、子どもの世代でも維持していきたいと思っています。

そもその幸福とは何かということでもいろいろ考えたのですが、恐らく幸福はすごく多様なものであり、皆さんのお話をお伺いしても個別性に富んでいると思いました。

いろいろ考えていくと、私は理系なので過去の研究成果とか論文がどうしても気になってしまうのですが、ちょうど昨年12月に内閣府から『幸福度に関する研究会』という報告書が出ました。私はこれはすごくよくできているのではないかと考えていまして、一度是非皆様もお目に通していただければと思っているのですが、どういうふうになっているかと言いますと、主観的幸福感というものがあって、それを3本柱で支えるものがあるとなっています。1つは社会経済状況で、2に心身の健康、3に関係性です。皆様いろいろおっしゃったことというのは、だいたいここに当てはまってくるのではないかと考えています。社会経済状況、心身の健康、関係性をどういうふうに今後維持して高めていくかということ、まさに政策として落とし込んでいくことが大事だということと、政策だけではありませんので、国民お一人お一人のお気持ちをそれらにつなげていく、自助を中心に、共助を強め、最後に公助というセーフティネットを構築することが大事なのではないかと考えています。

先ほど、決断ができないことというのが一番の問題意識だと申し上げましたが、なぜ決断できないかということも補足しますと、私の立場から申し上げるのは大変恐縮なのですが、やはり政治に決断力がなかったのではないかと私自身は感じています。ただ、政治家というのは一人ひとりの国民の代理者、代弁者です。その政治家を選んでいるのは国民の皆様であって、それが日本の民主主義の形になっているわけです。やはり国民一人ひとりの考え方が政治に反映されていって今の状況になっていると思います。

では、国民はどうしたらいいか。私は2つあると思っています、1つは他者をもっと受容するということ。どうしても批判や否定が前に出過ぎると、本人もネガティブな気持ちになりますし、言われた方もつらいですし、結果的に社会の活力が低下します。そこをもう少し受容することを、こういう場のハッピーな皆さんではない、とても困っている方、日の当たらないような方に対して、負担能力のある方を中心にもっと受容するというお気持ちを持っていただく。それが多分納税だとか異なる他者の受け入れ、共助・公助につながるのではないかと考えています。

もう一つ、日本人は真面目すぎるということです。真面目なのが世界有数の便利さや安全さにつながっていて、例えば電車はぴったり来ますし、夜道を帰っても大丈夫だということがあります。ただ、短所としてシステムのフレキシビリティがなさ過ぎると思っています。

役人をやっていますとすごく思うのですが、いろんな御意見をいただきますし、大体の方向性はみえるのですが、法的整理、財源、公平性、タイミングなどすべての条件がそろわないとなかなか物事を動かさないとこがあります。ただ、諸外国を見るとどうかというと、諸外国の役人と議論していても思うのですが、結構適当といいますかフレキシブル

です。日本ほどそんなに詰めないですし、柔軟にやってみて間違えたら修正みたいなことが比較的すぐできているという印象を持っています。

この切羽詰まった日本の状況では、そういうフレキシビリティをもっと出すことが重要であると思います。日本は小さな国家と言われていますが、確かに給付と負担面からみると小さな国家だと思えます。ただ、私は規制の面から見ると多少大きな、邪魔をしているところもあるのではないかと考えていまして、それは日本の真面目さの裏返しなのではないかと考えています。

ですので、規制は公平性や中立性を確保するために大事なのですが、規制という概念をもう少し事前規制から事後規制、例えば2000年に導入された介護保険も、措置から契約へと事後規制側に寄っている制度になっていますが、より事後規制が大事なのではないかと考えています。

医療も例えば、あるべき給付、あるべき負担のどちらかの議論にすごく寄りやすく、医療関係者はいかに日本の医療を、すばらしい医療制度だと私は思っているのですが、それをいかに守るべきかという議論になりますけれども、ただ、医療の中にも問題、もともと病床数や平均在院日数が多過ぎて、医療の質が確保できなかつたり医療費が急増したり、フリーアクセスも確保されている反面モラルハザードが起こってしまいやすいというような、そういう体質があるわけです。片や負担をする方は、医療費亡国論という言葉もあるようにとにかく経済状況にあわせ医療費を抑制すべしという議論がある。そこを、未来世代への医療の持続性に向け、やはり中庸の議論がもう少し必要だろうと考えていまして、負担と給付をお互いに見つめ合いながら、その落としどころをどうするかというバランス感覚、そして判断が大事なのではないかと考えているところです。

2025年、2050年の日本はそういうことが相まった先にあつて、なかなか難しい課題だと思っているのですが、先送りをせず、やるべきことをやるという、これがまず一丁目一番地なのではないかと考えている次第です。

以上です。

○阿部部会長 ありがとうございます。

12時近くになりましたので、先ほどスケジュールについて御質問があったので、その点だけ確認させていただきたいと思えます。

資料3の3ページ目に今後のスケジュールが書いてあります。要点としては今後、月に2回ずつ部会を開きまして、その結果を私と部会長代理がフロンティア分科会の方に月1回報告するような形になっていきます。

実際に第4回のフロンティア分科会が4月末にありますけれども、この時点で中間報告について報告をすることになっております。ですので、このときまでに中間報告の素案みたいなものができている必要があるかと考えております。

その前の第3回、3月末に中間報告のとりまとめ方針をここで議論することになりますので、ということはその直前の第4回ときには、ここの幸福部会としてどのような報告

書をつくっていくかということについて、少なくとも骨子ぐらいの状況の目次案みたいなものはできている状態にしていきたいと思っています。

全8回しかありませんので、かなり強行軍でやりたいと思いますけれども、その点よろしく願いいたします。

今回も含めて第2回、第3回は、委員の皆様にも宿題として出してありますコメントについて発表していただく機会を設けます。その回数の割り振りは今、流動的でございますので、この場では申し上げませんが、後ほどお知らせいたします。もう既に第2回、第3回に御了承いただいている方もいらっしゃると思いますが、流動的なところもございまして、後ほど御相談させていただきと思います。

私の方からは以上です。

最後に質問等ございますでしょうか。

○福島委員 1つ確認をさせてください。コメントを私たちは出すように求められています。コメントの1つ目のフォーマットで「現在の延長線上にある2050年の日本の幸福の姿はどのようなものか」という、この文章が日本語として多義的かなと思います。

つまり、現在の延長線上にある2050年の日本の幸福の姿というのは一体どういう意味か。今のまま、このまま2050年になった場合の幸福を想定するのか、それとも2050年時点であるべき幸福の姿を想定するのか、どちらともはっきりしないんですが、そこだけお願いします。

○阿部部会長 部会長の理解としてお話をさせていただきますけれども、1つ目の質問は今の延長線上にあるとどうなるかという話で、2つ目の質問は、それとは違うあるべき姿はどうなるものかということだと思います。ですので、私の1つ目の回答は、今の延長線上には幸福の姿はないというのが結論で、それに尽きるんですけども、ですので、むしろ2番目の質問の2050年のあるべき幸福の姿に焦点を置いて、御報告いただければと思います。

○福島委員 はい。

○阿部部会長 ほかにはございませんか。本日は皆様お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございました。